地理學的單元論

金尾宗平

一、序言

現今地理學の問題中特に重要で而も未解決なものに單元論がある。單元 Unit は地理就中地誌研究の最初にぶつつかる根本的なものである。隨つて之れが採り方の適否は研究の全生命を支配するものと云つてもよい、地誌研究の盛んな今日に於ては眞先に之れが吟味に取りかゝらねばならぬ事だと思ふ。

然るにそれが資料たる內外諸學者の採れる單元なるものの纏つたものがないので、自分の知れる範圍を系統化して記述し且つ最後に其れ等を比較論評して、吾人の之れが採否に對する態度を決定し以て大方諸賢の御指導を仰ぐつもりである。

二、單元の種別

不自然なる行政的單元(政治區)に對して自然的單元(自然區)と云ふ事がある、其の場合の自然の意味は廣義に使つたもので更に其の中には人文地理的單元と自然地理的單元とが對立する前者の中には經濟地理的單元(經濟區)商業地理的單元(商業區)住民(人口、民族等)地理的單元等と、尙ほそれ等を綜合する綜合人文地理的單元とがある。

後者の方にも地形的單元(地形區、地形的地域、自然地域(狹)自然的單元(狹)等呼び方區々)氣候的單元(氣候區)植物區(植物帶)動物區、地質區等とそれ等の綜合自然地理的單元とが內在する譯である。

人文地理的單元と自然地理單元との更に綜合されたる綜合地理的單元(廣義の自然區又は自然地理的單元)即ち地理的單元或は單に地理區と稱するものがある。以上はそれ〴〵特有の個

性を有するもので互に對立してもそこに各獨自の意味をなすものである。

三、行政的單元

我が國で從來專ら使はれて來た國別を始め府縣別其の下にある市町村別國を基礎とする道別府縣を基礎とする地方別（小學地理書式のと官廳統計のとあり）等は分水嶺にによるなど多少の自然的根據はあるが概して不徹底な不自然的な區劃である。舊來世に出て居る多くの地理書や地圖類（分縣地圖 Philip の Handy Volume Atlas の如き）は大抵之れによつたものである。

四、經濟地理的單元

H.Kerp は「經濟及び商業地理學（一九一三年版）」の中に經濟活動に基きて全世界を大西洋歐羅巴、印度、東亞、大洋洲、北米及び南米の六つの純粹な世界經濟地域に分けて居るが、F.Küne のアルゼンチナの經濟區や Russel Smith の北米の自然的區劃の如きは純粹な經濟區ではなく單に經濟區を中心とせる自然區域に止まる。

五、商業地理的單元

K.Andrees 主任の「世界商業地理（一九一〇—一九二一年出版）」の中には商業地域に據つて地方を幾つかに區分して居る。

六、地形的單元

自然區域を Unit として地理學乃至地誌研究の基礎とせんとする主義は、既に西歷十八世紀の頃から、從來の政治區域主義に反對して勃興して來て居た、其の主なるものに二系統あつて、獨墺學派は地形主義を英米學派は主として氣候主義を奉じて居る。

Polykarp Leyser（獨）は一七二六年に「絕えず變動しつつある政治區域を地誌研究の單位とする事は非科學的也」として地形區に據らんと提議した、Zeune は之れに贊成し遂に K.Rittel に到つて愈々地誌研究に之れを採用された、爾來此主義は地誌研究に教授上に大切なる系統として尊重される樣になつた。

W.Sievers（獨）の主宰する「一般地誌二卷」（一九〇七年）も全部此主義によつて出來て居る。

A.Hettner（獨）の「地誌綱要一卷（一九〇七年）」も此主義で、E.Banse の圖解地誌（一九一四年）にも之れを採つて居る。

J.W.Gregory の「Geography（一九二五年版）」の中にも六大洲は勿論英國とか日本とか New-zealand とかの細部に到る迄の Geographical divisions として構造地形區の明瞭な地圖を入れて說明して居る。

The world（一九二五年版）の中へも著者 Leonard Brooks は南米、北米、Asia, Newzealand 等の Structural divisions を圖說して居る、L.Kober が Der Bau der Erde（一九二一年版）の中に出して居る Africa 其他の地形區は前記 Sieber のに大體は似て居る。

北部 Sweden の地形區（地理學評論第二卷參照）

下村教授は地理學評論第二卷第十二號より第三卷にかけて「日本の地形區に就いて」と題して本州島を糸魚川靜岡線を以て東北日本と西南日本とに別け、前者を更に東西の二帶に、後者を內外の兩帶に區劃し、その兩帶を尙ほも各四山地區に更に數多の部に細分して居られる。

大橋良一氏は地理學評論第三卷に「北日本の地質區に就いて」と題して詳細な單元圖を入れて說明して居られる。

七、氣候的單元

氣候に依る自然地域をば地誌教授に採用すべきを主張したのは英人 A.J.Herbertson で、彼は一九〇五年出版の英國王立地學協會の雜誌にこれを發表した、初は世界を十四區に、後手を加へて四區十八型に增分した（別圖氏の氣候區參照）英米諸國の學者の中には彼の說に贊同する者頗る多く、L.Brooks（英）の The World の開卷第一頁に出して居る「世界の自然地理區」も仝氏の氣候區其儘を轉載して居るのである。Johns and Hoitlesey（米）はシカゴ大學出版「經濟地理學序論」の中に Herbertson の氣候區を基礎に燒直して四區十五型のものを作つて居る（大阪地理學會編地理統計氣候の部參照）松永勇氏は地理教育第六卷第四、五兩號に右を一般人へ解り

易く紹介して居られる。

G.R.Swaine の Environment : A natural Geography 英版）は全く氣候區に基いて（大洲別に氣候區の圖版あり）世界地理を解說して居る。

G.R.Dryer の「高等地理學（一九二〇年版）の中には各種の分布圖と共に主として氣溫と降水との狀態」を基礎として世界を五つの Provinces と十四の Type 區とに分けた氏獨特の氣候區圖版を挿んで詳細に說明して居る。

Unstead and Tay の「商業地理學」も氣候主義に基いて居るものである。

Emm. de Martonne の「地文地理（一九二二年版）」中には世界を十六區の氣候區に別けて居る

R.Sieger Andrees の地理書（一九二一年版）第一卷の中には Supan のに基き（多少之れを變更して）說いて居る、Supan は其の「地文地理（一九二一年）」の中に世界の風土と氣候的要素の上から熱、溫、極の三帶を區別し更に之れを三十六區に細分して居る。

W.Köppen は「世界の氣候（一九二一年）」の中に主に植物の種類に基いて十一の氣候區を建てゝ說明して居る、詳細は地理學評論第一卷の六一二頁並に高橋博士の地理學通論二二五頁參照、外に五大區二十四小區に別つたものもある。

其他福井氏は地理學評論第四卷第九號に「我邦に於ける氣候分類に就いて」と題して、雨量（日本を四式十二區に分つ）並に氣溫（五氣候九區八型に區分）に基く氣候區がそれ〴〵作られてこれに就いて詳說してある。

岡田博士の創作になると云ふ日本氣象區（內地を九區に分つ）の如きも一種の氣候區に屬する。

尙ほ世界の風系氣候區（九區）風土區（六區）等も出來て居る。（中川氏日本氣候學參照）

尙ほ E.Huntington の Civilisation and Climate の中に出て居る「氣候を基礎とする人間精力の分布圖」の如きも氣候區と密關あるものである。

八、生　物　區

植物區では前記 De. Martonne や Köppen の氣候區は植物の分布を基礎としたもので見方に

よつては一種の氣候區である、尙ほ Suppan は世界の植物生存地を四群十二區に別けて居る、因に我國の植物帶は普通四帶に區分されて居る（普通教科書並に地圖參照）

次に動物區で最も人によく知られて居るのは L.Sclater の全世界を二界（新舊又は南北の）六大區に分ち更に若干の亞區を設けたものである A.R.Wallace は之れに贊成して世界を六大區と二十四亞區とにして居る、Trouessart は S 氏の に更に北極と南極との二區を加へ R.Lyddeker は古生物に重きを置いて之れに變更を加へ三大區と十亞區とにした。

Supan は陸棲動物の分布上三洲八區を設け、K.Möbius は陸棲域に十一區、水棲域に六區を劃した、Arnold Jacobi は哺乳獸と鳥類との分布から陸棲域を三洲十一區にした、此外 Günther の魚學上からの世界の區分や Angelo Heilprin の區分 Blandford の三大區分、Sherrpe や A.Newton の鳥學上の區分（後者は六區に）、W.L.Sclater と P.L.Sclater 共書「哺乳類の動物地理（一八九九年版）」中には六大區と二十九小區とに區分した地圖があり、一九二一年から二三年に亙り出版した獨の F.Dahl の著書中には四大區と二十一小亞區一諸島が區劃されて居る（汎論地文學並に地理教育第四卷參照）

終りに黑田博士は地學雜誌大正十四年の七月號に「日本鳥類の分布に就て」と題して或國の鳥類に依る動物區を、二大區域（古北、東洋）の中に十一線を劃して十三區にして居られるのは面白い。

九、地理的單元

廣義の自然區又は自然的單元の事で自然人のを綜合した綜合地理的單元を指す、だから斯る方法で或地域内を區分せんとすれば勢或地區は地形を主とし、或地區は氣候を或地區は植物帶を或地區は人文を主にして自然區を決定せなければならぬと東京高師の田中先生は述べて居られる、故 Herbertson 及び J.F.Unstead 兩教授の地理的單元（U 氏著の Iberia 半島や England 島の區分の如きもそれ）の如きは之れに屬する、

尙ほ Russel Smith 教授の北米の自然的區劃は經濟中心の綜合的單元で、外に仝氏の Human Geography（一九二二年版）の中には世界の綜合地理的單元が出て居る、小川博士著の中等世界地理帖附錄の覆圖中にも之れと同樣なのが（六大洲別に）地文區として出てゐる。（博多成象堂發行）

F.Kühn のアルゼンチナの經濟區、Griffith Taylor 教授の濠洲の區分等も皆綜合的の單元である。（評論三ノ一田中先生の論文參照）

田中先生は地理學評論三ノ一に「日本の地理區」と題して日本列島の地理的單元を創成されて居る、日本地誌研究上に一大光明を與えられた其の功績は特筆すべきものだと思ふ、先づ日本列島を十大單元に別ちそれ等の大部分をば更に多くの中單元に分け尙ほ副單元に細別されて居る。

麥谷龍次郎氏は地理學評論第二卷の中に「地理學より見たる行政區劃に就いて」述べ中に日本の地理區を考案して居られる、それに依ると本州島を東北、關東、中央太平洋岸、西部太平洋岸、中央高地、瀨戸內海、中央日本海々岸、西部日本海々岸、西部九州、南島の十大區に別ち、更に東北區を北太平洋岸區と北日本海岸區とに又西太平洋岸區をば紀伊半島區と四國太平洋岸區、九州太平洋岸區等に分ち尙ほ此下に、District を考へて居られる、然し大部豫想的のものである事を斷つてある。石橋博士は日本經濟地理及び實業教科地理教科書日本之部の中へ本州を關東、海道、中央、北陸、近畿、山陽、山陰、表東北（前には單に東北）羽越の九地方に分けて述べて居られる。

自分も鄕土地誌の方で福岡縣內を各種の地理的要素に基いてそれ〴〵の單元圖を作り、これを基圖（ベースマップ）の上に全部を重ねて描きその綜合的の結果に依つて大體の地理區を創作して見た、何れ他日發表して御指導を乞ひ度いと思つて居る。

十、兩系統の比較

行政的單元と自然的單元、何れにも一長一短がある、前者の主なる短所は（一）變動し易き事

（大戰後の如く）と（二）地誌研究上不自然不經濟で非科學的な所のある事の二であるが、長所としては（一）境界の明瞭なる事と（二）國民教育上國家的精神の涵養上に特に便利なる事との二は其の主なるものである後者は大體その正反對と考へればよい。

次は全じ自然地理的單元中の地形主義と氣候主義との比較である、前者の長所は區劃の比較的明かな點で後者には不鮮明で境界のつけにくい缺點がある、地形も氣候を或程度迄支配し人文に密關するも、氣候は直ちに植物の分布を支配し動物に影響し、人生には直間接に最も深く關係し且つ地形とも濃密に因果の關係を結ぶものなれば或は前者より以上に重きをなすかも知れぬ、氣候の研究を地形ほどに明確徹底的に行ふ事には幾多の困難があるが、地理學の立場から云へば今後益々盛大にならねばならぬ方面である。

十一、吾人の採否に對する態度

純粹な科學的地理學の研究をする人にとつては勿論自然的單元一點張りでもよからうが、普通教育に於ける地理科の立場は地理學者の養成ではなく他の諸教科と共に「健全なる國民を教養せん」とするのであるから、文部省の示す要旨にもある通り國勢の理解國家的精神の涵養と云ふ方面を全然見逃してはならぬ、勿論地理學的教育に依つても結局は此の目的に到達はしやうが、ユニットの採り方から云ふと、どうしても外國地理では國家と云ふ行政（政治）的單元を基本として外國其の物を充分に認識理解させると同時に、それと我國との關係を考察させ又地理的狀態を充分に比較推究させて、そこに吾々は生徒兒童をして彼等の個人的生活の上にも又國家的生存の上にも種々の生きた刺戟教訓を得させなければならぬと思ふ、こゝが國民教育上特に地理科の一大生命とすべき點ではなからうか、だから（一）各大洲の總論概括の如き場合とか（二）我國と餘り深い關係のない地方とか、（三）日本地理の樣な際などに於ては自然的單元に據るべきであるが、重要諸國を含む諸大洲の地方

誌を細觀する場合の如きは必ず先づ獨逸とか佛蘭西とかの行政的單元を採るべきであると思ふ而して更に其の內部に立ち入つて研究する樣な場合には其の行政的區劃の內に在つて自然的な單元をとつて進むべきである、恰も本邦の地誌を研究するに當つて邦國內を幾多大小の地理區に別けて觀察推究して行くと同樣である。

扨て其の單元の大小は學習者の程度に應じて決定すべき問題で、程度の高まるに從つて次第に大單元は細分して小單元に、單元は更に副單元にと深く進むべきであらう（地理教育大正十五年八月號田中教授の論文參照）

又地形主義と氣候主義とは一般から云へば何れにも偏すべきではなく尙ほ植物帶・人口密度・生產地帶・交通運輸地帶・商業圈・聚落分布區等をも採つて之れ等を凡て綜合し以て綜合地理的單元（地理區、地理的單元）として研究すべきであらう、要は地理は場所によつて統一されたる綜合帶を認識せんとする學問であるから、部分に偏し斷片孤立して全姿（地理的景觀Landschaft）を見るの能を失ふに到つては全くの本末轉倒である。（三、一〇、二）

獨逸の地理學界

寺田貞次

是迄英吉利を初め、佛蘭西並に北米合衆國の地理學界を、簡單ながら考究しましたから、今度は獨逸に於ける狀況を視察致して見ようと思います。然し、獨逸は近世新地理學の發祥地でありますだけに、地理界は却々にぎやかで、觀察すべき點も從て少くありませぬ、少くとも、地理學研究室の狀況、獨逸に於ける地理學者の狀況、地理學生の狀況並に地學關係機關等の各項目に付きまして、調査しなければなりませぬ。短日月の滯留では到底完全を期し得ない仕事で